

The Waste Land における T. S. エリオットの死観

T. S. Eliot's View of Death in *The Waste Land*

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成21年9月30日受理)

はじめに

T. S. Eliot の初期の代表的な詩である *The Waste Land* (1922) には次のようなエピグラフがある。

‘Yes, and I myself with my own eyes even saw the Sybil hanging in a cage; and when the boys cried at her: “Sybil, Sybil, what do you want?” “I would that I were dead”, she caused to answer.’ (trans. Southam 133)

これは、紀元前1世紀頃のローマの作家 Petronius が書いた *Satyricon* からの引用文である。クマエ (Cumae) の巫女シビルは、アポロ (Apollo) に懇願して、手に握った砂の数だけ長生きすることを許される。しかし、彼女はアポロに若さを保つことを願わなかったため、老いぼれて予言の力も衰えてしまう。この小説の語り手は、そうした彼女の現実の姿を紹介しているのである。その内容には、理由は明らかでないが、彼女の死の願望が示されている。

エリオットの1922年の詩はわれわれ読者に、本稿で後述するように、人間社会の死の様相や人間の精神的な死の様相を示唆する場面を描いている。彼は、シビルが願望する死のイメージを土台にして、われわれにこれらの死の様相を理解させようとしているように思われる。そこには、彼のどのような死観が反映されているのであろうか。本稿ではこの点を探求したい。

1

The Waste Land は5部から構成されている。第1部 “The Burial of the Dead” は次のような書き出しである。

April is the cruelest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain. (61)¹

ここに記述されている花やその根がわれわれ人間としてなぞられていると解釈してみたい。そうすると、4月の季節を基調とする上の4行は、生命の躍動がこれから始まる期待を裏切り、人間社会を死の土地と見な

したり、そこに住む愚鈍な人々の追憶や欲望を一緒にして提示したりするという内容になるであろう。

エリオットは、“Andrew Marvell” (1921) の中で、17世紀イギリスの詩人アンドルー・マーヴェルが書いた“To His Coy Mistress”の次のような詩行に言及している。

*Let us roll all our strength and all
Our sweetness up into one ball,
And tear our pleasures with rough strife,
Thorough the iron grates of life.* (qtd. in “Andrew Marvell” 296)

エリオットは、移り気と真面目さが結合し、そのために後者が強められたウイットの例として取り上げている (“Andrew Marvell” 296)。彼は、求婚者の気まぐれな発言が実は真剣になって恋人を口説き落とすためのアイロニカルな手法であることを示唆しているのである。

この種のアイロニカルな手法が1922年の詩の第1部の冒頭にも適用されていると言える。ここでは、4月の異常な季節感、草木と人間の精神活動の融合が描写されている。こうした語り手の変わった考えがわれわれに、かえって人間社会や人間の内面の様相を指摘しようとする印象を与えるのである。

第1部では、その内面の様相の一端が次のような表現で書かれている。

Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet.
Flowed up the hill and down King William Street,
To where Saint Mary Woolnoth kept the hours
With a dead sound on the final stroke of nine. (62)

これは、冬の朝のラッシュアワーに、実業家、サラリーマン、タイピストなどの通勤者たちがロンドン橋を渡って金融・商業の中心街のシティーへ足早に向かう光景である (Hayward 93)。原注によれば (“Notes on the Waste Land” 76-77)、3行目は13-14世紀イタリアの詩人 Dante Alighieri の長編叙事詩 *La Divina Commedia* の *Inferno* 3: 55-57を下敷きになっているし、4行目は同じ詩人の *Inferno* 4: 25-27を下敷きになっている。前者の出典の文は、“si lunga tratta / di gente, ch’io non avrei creduto / che morte tanta n’avesse disfatta.” (“such a long stream of people, that I should never have believed that death had undone so many.” trans. Southam 151) である。後者の出典の文は、“Quivi, secondo che per ascoltare, / non avea piante, mai che di sospiri / che l’aura eterna facevan tremare.” (“Here, there was to be heard no sound of lamentation, only sighs which disturbed the eternal air.” trans. Southam 152) である。エリオットは、第一次世界大戦後のロンドン市民を中世の長編叙事詩に描かれた地獄の住人に見なしている (“What Dante Means to Me” 128)。こうした都会の退廃的な雰囲気の中で注目されるのは、通勤者たちの進む方向が聖メアリー・ウルナス教会である。この教会が午前9時に鳴らす鐘の最後の音は、キリストが死んだ第9時（午後3時）を思い出させる (Southam 153)。空しい響きを感じさせる鐘の音は、退廃的な様相を漂わせる人間社会の中で亡霊的な存在に見なされるロンドン市民が宗教に無頓着であることを示唆している。

聖メアリー・ウルナス教会の鐘の音が9時を打ち終わって死の響きを漂わせたとき、詩では次のような場面へと変わる。

There I saw one I knew, and stopped him, crying: ‘Stetson!
‘You who were with me in the ships at Mylae!
‘That corpse you planted last year in your garden,
‘Has it begun to sprout? Will it bloom this year?’

‘Or has the sudden frost disturbed its bed?
 ‘O keep the Dog far hence, that’s friend to men,
 ‘Or with his nails he’ll dig it up again!
 ‘You! hypocrite lecteur! – mon semblable, – mon frère!’ (62-63)

2行目の“Mylae”はイタリアのシチリア島北西部の町である。そこは、ローマ艦隊が地中海の覇権をめぐる第一次ポエニ戦争（264–241 B. C.）でカルタゴ海軍に勝利した場所である。先の詩行でロンドン市民がダンテの地獄の住民のように描かれていたことを参考にすると、語り手がこの戦争の死者にたとえられる一人の知人を呼び止めて話しかける。この場面で注目されるのは、庭に埋葬された死骸の不安な行末、苗床への霜の悪影響、人間と友だちである犬の悪行の心配である。これらすべては、天候にかかわって描写されている。こうした描写から読み取れるのは、われわれ読者が第1部の冒頭の残酷な季節感の背景となっているイメージ（人間社会や人間の退廃的な姿）を再確認することであろう。その上、われわれを非常に意識した語り手の発言が印象的である。一見気まぐれと思われる彼の発言内容は読者に、朝の通勤の死的な雰囲気と和ませながらも、第1部で感じられる人間社会や人間の醜悪さを強く心に留めさせるための有効な手段である。そこには、1921年の評論で述べるエリオットのアイロニカルな手法が認められるであろう。

2

第2部“A Game of Chess”の冒頭は次のような人物を紹介する。

The Chair she sat in, like a burnished throne,
 Glowed on the marble,... (64)

1行目の原注は、16–17世紀イギリスの劇作家 William Shakespeare の *Antony and Cleopatra* II, ii からで (“Notes on the Waste Land” 77), エジプトのクレオパトラが乗る豪華な舟の様子を伝えている。この様子を参考にすると、上の詩行に登場する人物は、生活に余裕があり、クレオパトラを思わせるような有閑女性である。

ところが、そのような外観とは裏腹に、心が落ち着かない有閑女性は、部屋を訪れた男性に次のように話しかける。

‘What shall I do now? What shall I do?
 I shall rush out as I am, and walk the street
 With my hair down, so. What shall we do tomorrow?
 What shall we ever do?’ (65)

彼女は相手に、“What shall ...?”と問いかけて、精神的な不安を訴えている。その上、男性からの快い返事が返ってこないで、彼女は自堕落な生活を示唆して、彼の冷淡な態度をなじっている。

ここでは、単に有閑女性と男性との不毛の愛が描かれているだけではない。彼女の部屋にある暖炉の上にフィロメラの化身の絵が飾られている。この絵に関する次のような記述に注目したい。

The change of Philomel, by the barbarous king
 So rudely forced; yet there the nightingale
 Filled all the desert with inviolable voice
 And still she cried, and still the world purposes, (64)

ローマの詩人 Ovid (43 B. C. – ? A. D. 17) の *Metamorphoses* に言及して、エリオットは、フィロメラがバルカン半島の南東部にあったトラキア (Thrace) の国王テレウス (Tereus) から陵辱を受けた後、ナイチンゲールに化身したというギリシャ神話を利用している (“Notes on the Waste Land” 77)。この絵は、

フィロメラの悲劇とテレウスの強欲を伝えているだけではなく、そうした人間の強欲さが“the desert”と化した人間愛のない不毛の現実社会に満ち溢れていることを暗示している。その暗示の一例が、切なる訴えをする有閑夫人と肉欲の虜になったかに見える男性との関係に認められる。

第2部の後半は場末にある酒場へと変わる。二人の女性がそこで話をする次のような場面を見てみよう。

Now Albert's coming back, make yourself a bit smart.
 He'll want to know what you done with that money he gave you
 To get yourself some teeth. He did, I was there.
 You have them all out, Lil, and get a nice set,
 He said, I swear, I can't bear to look at you.
 And no more, can't I, I said, and think of poor Albert,
 He's been in the army four years, he wants a good time,
 And if you don't give it him, there's others will, I said.
 Oh is there, she said. Something o'that, I said.
 Then I'll know who to thank, she said, and give me a straight look. (65-66)

リルと彼女の知人が話し合っている。リルの亭主アルバートが除隊して4年ぶりに帰って来るので、知人は彼女にもう少し身なりを整えるようにずけずけと諭している。その諭しには、機会があれば、アルバートを横取りしようとする知人の思惑がちらつくのである。その思惑を感じて、リルは相手を睨みつける始末である。性の退廃が二人の会話の内容から明らかになる。神話時代から受け継がれている不毛な愛が下層階級にまで及んでいるのである。

第3部“The Fire Sermon”に登場するタイピストの描写を考察してみたい。彼女は、冬の朝、ロンドン橋を渡っていた通勤者かもしれない。仕事を終えて帰宅した彼女は、部屋の中を片付けて、ストーブに火を入れ、食事の準備をする。家屋周施屋の店員である若者がやって来る。これは不倫の恋の場面である。彼が出て行った後、タイピストの言動が次のように描かれている。

She turns and looks a moment in the glass,
 Hardly aware of her departed lover;
 Her brain allows one half-formed thought to pass:
 ‘Well now that's done: and I'm glad it's over.’
 When lovely woman stoops to folly and
 Paces about her room again, alone,
 She smooths her hair with automatic hand,
 And puts a record on the gramophone. (69)

彼女の脳裏にぼんやりと浮かぶのは、先の不倫の相手ではなく鏡に映った自分の姿である。彼女ひとりで部屋を歩いたり、髪を何気なく手で撫でついたり、その手で蓄音器をかけたりする。このような動作は、生きる希望を見失った彼女の姿をありありと示している。彼女には相手に対する愛情が少しもないのである。

3

このようにして、第1部でうかがわれる人間の精神的な死の様相の一端が、第2部と第3部で見られる男女間の不毛の愛であると言える。そこには、人間の「原罪」を信じるエリオットの考えが反映しているように思われる。この点について検討してみたい。

エリオットは、1916年の10月3日から12月12日までイギリスのヨーク州イルクリー (Ilkley) で現代フランス文学に関して6回の講義を行っている。現在、講義要目が残っている。第2回の講義題目“The Reaction against Romanticism”には、次のような要目の文章が見られる。

The beginning of the twentieth century has witnessed a return to the ideals of classicism The classicist point of view has been defined as essentially a belief in Original Sin—the necessity for austere discipline. (qtd. in Schuchard 27-28)

20世紀は古典主義への回帰の時代であると、彼は主張する。この古典主義の視点は、基本的に、「原罪」への信仰と厳しい訓練への必要性として定義される。

エリオットがこのように主張する背景には、イギリスで注目していた同国の哲学者・批評家 T. E. Hulme (1883–1917) の影響が認めらよう。² ヒュームは、フランスの社会主義者 Georges Sorel (1847–1922) が著した *Réflexions sur la violence* の英訳書 *Reflections on Violence* を1915年にイギリスで出版している。エリオットは同年にはヒュームの存在を知っていて (“To Mrs Jack Gardner,” 4 Apr. 1915,” *The Letters of T. S. Eliot* 94), この英訳書を2年後に “Mr. Hulme is also a contemporary. The footnotes to his introduction should be read.” (“[A review] of *Reflections on Violence*. By Georges Sorel” 479) と評している。

ヒュームはこの英訳書の序文で次のようなことを述べている。

What is at the root of the contrasted system of ideas you find in Sorel, the classical, pessimistic, or, as its opponents would have it, the reactionary ideology? This system springs from the exactly contrary conception of man; the conviction that man is by nature bad or limited, and can consequently only accomplish anything of value by disciplines, ethical, heroic, or political. In other words, it believes in Original Sin. We may define Romantics, then, as all who do not believe in the Fall of Man. (“Translator’s Preface to Georges Sorel’s *Reflections on Violence*” 249-50)

ソレルを引き合いに出す彼の信念の基調は、人間本来の性悪説と訓練による物事の達成である。その信念の拠り所となっているのは、ロマン主義者の場合と異なって、人間の「原罪」説である。

エリオット家の宗教はキリスト教のユニテリアン派³であったが、彼はこの宗教を素直に受け入れることができなかった (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)。また、イルクリーで講義をするまでの彼は、両親の意に反した行動（フランスへの遊学、イギリス人との結婚、学問の道を選択しない人生、イギリスでの定住）によって、彼らに対する罪意識を抱いていた。そうした時期の彼に罪意識のあり方（「原罪」説と情緒の厳しい訓練）を教えてくれたのが、本稿で言及したヒュームの信念であったと言える。エリオットは彼の「原罪」説に共鳴して、1922年の詩の中で人間社会の醜悪な一面や男女間の不毛の愛を描いているのである。

4

第3部の最後の5行は次のような場面を示している。

To Carthage then I came

Burning burning burning burning

O Lord Thou pluckest me out

O Lord Thou pluckest

burning (70)

1行目は、初期キリスト教の指導者 St. Augustine (354–430) が *Confession* の中で青春時代の肉体の欲望を綴った言葉から引用されたものである (“Notes on the Waste Land” 79)。2行目はさまざまな欲望の炎を “burning” の繰り返しによって示唆し、3–4行目は罪深さから救われた彼の喜びを伝えている。最

後の行は、われわれと一緒にあって、人間の心の浄化を願う詩行となっている。

この最後の詩行はわれわれに、次の第4部“Death by Water”でそうした心の浄化を気づかせる準備段階の役割を果たしている。同部は次のように書き始められている。

Phlebas the Phoenician, a fortnight dead,
Forgot the cry of gulls, and the deep sea swell
And the profit and loss. (71)

これは、フェニキア人のフレバスという人物が現世（カモメの叫び、深海のうねり、損得）から引き離される場面である。言い換えれば、彼の死体から現世のさまざまな思いが解放されていく状態を連想させる場面である。

その後、次のような詩行が示される。

Gentile or Jew
O you who turn the wheel and look to windward,
Consider Phlebas, who was once handsome and tall as you. (71)

“you”は、異教徒であれユダヤ人であれ、この詩にかかわるわれわれを暗に指している。われわれは、風上に注意を払いながら舵を取り人にたとえられ、先のフレバスの水死のことを考えよ、と声をかけられているのである。それは心の浄化を始めるようにという声である。そこには、異教徒やユダヤ人に言及したり、フレバスを読者と同じようにハンサムで長身の人として呼びかけられたりする表現がある。こうした表現は、第1部で見られたようなアイロニカルな手法に基づく軽妙さを織り交ぜながら、われわれに物欲への執着心から離れるように促していると言える。

5

第5部“*What the Thunder Said*”の前半のテーマの一つは、キリストの復活の日に二人の弟子がエルサレムの近郊のエマオ（Emmaus）村へ旅することである（“*Notes on the Waste Land*” 79）。ここでは、二人の弟子の様子を示唆する詩行の表現内容を中心に考察してみたい。

次のような詩行から見てみよう。

He who was living is now dead
We who were living are now dying
With a little patience (72)

1行目は受難のキリストを指している。Luke 24: 13-31で記されているように、既述の二人の弟子は、イスラエルの救い主と思われていたキリストの死と復活に半信半疑である。しかし、彼らは、噂に聞くキリストの復活に一筋の期待を抱きながら、エマオ村へ旅する。2－3行目は、キリストの死後の人生に対する彼らの不安と望みを盛り込んだ内容を暗に表し、この死が彼らの精神状態に影響を及ぼしていることを示唆しているのである。

二人の弟子の心境が次のような詩行で描かれている。

Who is the third who walks always beside you?
When I count, there are only you and I together (73)

“I”と“you”は二人の弟子に言及しているし、“the third”は彼らがエマオ村に行く途中で現れるキリストの復活した姿に言及している。1行目の原注（“*Notes on the Waste Land*” 79）で、エリオットは、探検隊の一行が極度に疲労すると、実際の人数よりも一人だけ多くいるような幻想にかられる南極探検隊の

記事を読んだことを書いている。彼は、この読書経験を抛り所にして、二人の弟子が体験したこの姿をわれわれに納得させようとするのである。

二人の弟子から復活した姿を気づかれたとき、キリストはたちまち姿を消す。ここで、注目したいのは、彼らがこの復活した姿を、旅の途中で実感するのではなく妄想している点である。彼らがこの出来事を妄想するにとどまるのは、われわれに宗教心の不十分さを改めて認識させることになる。したがって、彼らが旅する様子には、エリオットの罪意識のあり方（「原罪」説の認識と情緒の厳しい訓練の必要）が反映されていると言えよう。

こうした詩の理解に基づいて、その後に書かれている二つの詩行の記述内容を検討してみたい。まず次の詩行を見てみたい。

Poi s'ascese nel foco che gli affina (75)

この詩行は、ダンテの *Purgatorio* 26: 148 から取り入れられている。この詩行の原注では、次のような *Purgatorio* 26: 145-48 が引用されている。

“Ara vos prec per aquella valor
que vos guida al som de l'escalina,
sovenha vos a tempt de ma dolor.”
Poi s'ascese nel foco che [g]li affina.’ (“Notes on the Waste Land” 80)

(“And so I pray you, by that Virtue which leads you to topmost of the star — be mindful in due time of my pain.” Then divide he back into that fire which refines them.’ trans. Eliot in *Dante* 40)

ダンテの作品に登場する Arnaut Daniel (12世紀後半に活躍した吟遊詩人) は、浄罪の火に自ら進んで姿を消して、至福の状態を準備していると、エリオットは解説する (*Dante* 30)。アルナウトは、生前に好色であった罪を自責し、苦しみを受けることによってその罪を贖おうとしているのである。

もう一つの詩行に目を向けてみよう。

Quando fiam uti chelidon — O swallow swallow (75)

エリオットは原注 (“Notes on the Waste Land” 80) で、“*Quando fiam uti chelidon*” (“When shall I be like the shallow?” trans. Southam 197) の出所を示している。それは、作者・年代が不詳のラテン詩 “*Pervigilium Veneris*” (“The Vigil of Venus” trans. Southam 197) である。この詩人は、いつになったら春がやって来て、つばめのように歌うことができるのかを表現している。エリオットは同じ原注で、上の詩行についてフィロメラを念頭に置いていることを明らかにしている。既述のように、*The Waste Land* 第2部では、テレウス王によって捕らえられようとしたとき、妹フィロメラはナイチンゲールに化身する。その際に、姉プロクネ (Procne) はつばめに化身する。この詩の語り手は、姉妹のように、精神的な再生を願望するのである。

上で引用した二つの詩行の表現内容から浮かび上がる三人 (アルナウト、フィロメラ、プロクネ) は、この詩の語り手が希求する姿である。とはいえ、見逃してならないのは、その姿と深くかかわっているのがどん欲な人間と、プロクネの化身を歌える春の到来が期待できないことである。それは、われわれが人間社会の死の様相や人間の精神的な死の様相を再認識することを意味する。第1部の冒頭はこれらの死的様相を示唆していた。したがって、*The Waste Land* は、冒頭のこの示唆を連想させる円環構造になっていると言える。エリオットの死観は、この円環構造を形作る重要な役割を果たしているばかりではなく、その構造を通してわれわれ人間の罪深さを指摘しようとしているのである。

おわりに

エリオットはわれわれ読者の脳裏に、*The Waste Land* のエピグラフで描かれている巫女シビルの死の願望を強く焼き付ける。それは、われわれが直面している現実を意識させるきっかけとなっている。そこで、彼女の死のイメージに基づいて、われわれが人間社会や人間の内面に巣くう死の様相を理解するために、彼はそのポイントとなる場面に気まぐれと真面目さを織り交ぜて、後者に注目させるアイロニカルな方法を駆使している。その場面は、この詩の味読の開始となる1部の冒頭と、現世の物欲を離れて、人間の精神的な再生を促す第4部である。しかし、最後の5部ではこの精神的な再生を謳歌する春の到来が期待できないので、この詩は第1部の冒頭を思い起こさせる円環構造となっているのである。

エリオットの死観は、ヒュームが主張する罪意識のあり方（「原罪」説と情緒の厳しい訓練）の影響を受けている。われわれがこの詩の円環構造によって人間社会や人間の現実の姿を認識しようとするのは、彼の死観の背後にある上述の罪意識のあり方によるものであることを見落としてはならないであろう。

注

1. *The Waste Land* からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
2. この点や、後述するエリオットの両親に対する罪意識については、拙稿「T. S. エリオットの罪意識への T. E. ヒュームの影響」を参照。
3. この派については、下記の解説を参照。

“It [Unitarianism] is essentially Puritanism of drained its theology, since it denies the central tenets of predestination and damnation; heaven and hell are of less account than the mundane space which we inhabit between them. The measure of Man is Man himself and a peculiarly American optimism, about the progress and perfectibility of humankind, is thereby given a quasi-spiritual sanction.” (Ackroyd 17)

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Shuster, 1984.
- Eliot, T. S. “[A review of] *Reflections on Violence*. By Georges Sorel. Translated, with an Introduction and Biography, by T. E. Hulme.” *Monist* 27.3 (July 1917): 478-79.
- . “Andrew Marvell.” 1921. *Selected Essays*. 1932. London: Faber and Faber, 1951. 292-304.
- . *Dante*. London: Faber and Faber, 1929.
- . “[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By John Middleton Murry.” *Criterion* 10.41 (July 1931): 768-74.
- . “What Dante Means to Me.” 1950. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber, 1965. 125-35.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Hayward, John. Notes pour La Terre Vaine. *Poésie*. 1947. Trans. Pierre Leyris. By T. S. Eliot. Paris: Édition du Seuil. 1969. 91-103.
- Hulme, T. E. “Translator’s Preface to Georges Sorel’s *Reflections on Violence*.” *The Collected Writings of T. E. Hulme*. Ed. Karen Csengeri. Oxford: Clarendon P, 1994. 246-52.
- Schuchard, Ronald. *Eliot’s Dark Angel: Intersections of Life and Art*. New York: Oxford UP, 1999.
- Sorel, Georges. *Reflections on Violence*. Trans. T. E. Hulme. New York: B. W. Huebsch, 1912?

London: George Allen & Unwin, 1915.

Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.

古賀元章. 「T. S. エリオットの罪意識へのT. E. ヒュームの影響」『水産大学校研究報告』49.3 (2001): 123-29.